

桜の樹の下には屍体《したい》が埋まっている！

これは信じていいことなんだよ。何故って、桜の花があんなにも見事に咲くなんて信じられないことじゃないか。俺はあの美しさが信じられないので、この二三日不安だった。しかしま、やっとわかる 때가 来た。桜の樹の下には屍体が埋まっている。これは信じていいことだ。

どうして俺が毎晩家へ帰って来る道で、俺の部屋の数ある道具のうちの、選りに選ってちっぽけな薄っぺらい

もの、安全剃刀の刃なんぞが、千里眼のように思い浮かんで来るのか――
おまえはそれがわからないと言った
が――そして俺にもやはりそれがわからないのだが――それもこれもやっぱり同じようなことにちがいない。

いったいどんな樹の花でも、いわゆる真っ盛りという状態に達すると、あたりの空気のなかへ一種神秘的な雰囲気を撒き散らすものだ。それは、よく廻った独楽が完全な静止に澄むように、また、音楽の上手な演奏がきまつてなにかの幻覚を伴うように、灼熱し

た生殖の幻覚させる後光のようなものだ。それは人の心を撲《う》たずにはおかない、不思議な、生き生きとした、美しさだ。

しかし、昨日、一昨日、俺の心をひどく陰気にしたのもそれなのだ。俺にはその美しさがなにか信じられなようなような気がした。俺は反対に不安になり、憂鬱になり、空虚な気持ちになった。しかし、俺はいまやっとわかった。

おまえ、この爛漫と咲き乱れている桜の樹の下へ、一つ一つ屍体が埋まっていると想像してみるがいい。何が俺

をそんなに不安にしていたかがおまえには納得がいくだろう。

馬のような屍体、犬猫のような屍体、そして人間のような屍体、屍体はみな腐爛《ふらん》して蛆《う》が湧き、堪らなく臭い。それでいて水晶のような液をたらたらとたらしめている。桜の根は貪婪《どんらん》な蛸《たこ》のように、それを抱きかかえ、いそぎんちやくの食糸のような毛根を聚《あつ》めて、その液体を吸っている。

何があんな花卉を作り、何があんな蕊《しべ》を作っているのか、俺は毛根の吸いあげる水晶のような液が、静

かな行列を作って、維管束のなかを夢
のようにあがってゆくのが見えるよ
うだ。

——おまえは何をそう苦しそうな
顔をしているのだ。美しい透視術じゃ
ないか。俺はいまようやく瞳を据えて
桜の花が見られるようになったのだ。
昨日、一昨日、俺を不安がらせた神秘
から自由になったのだ。

二三日前、俺は、ここの溪《たに》
へ下りて、石の上を伝い歩きしていた。
水のしぶきのなかからは、あちから
もこちらからも、薄羽かげろうがアフ
ロディットのように生まれて来て、溪

の空をめがけて舞い上がってゆくのが見えた。おまえも知っているとおり、彼らはそこで美しい結婚をするのだ。しばらく歩いていると、俺は変なものに出喰《でく》わした。それは溪の水が乾いた磧《かわら》へ、小さい水溜を残している、その水のなかだった。思いがけない石油を流したような光彩が、一面に浮いているのだ。おまえはそれを何だったと思う。それは何万匹とも数の知れない、薄羽かげろうの屍体だったのだ。隙間なく水の面を被っている、彼らのかさなりあった翅《はね》が、光にちぢれて油のような

光彩を流しているのだ。そこが、産卵を終わった彼らの墓場だったのだ。

俺はそれを見たとき、胸が衝《つ》かれるような気がした。墓場を発《あ》ば《い》て屍体を嗜む変質者のような残忍なよろこびを俺は味わった。

この溪間ではなにも俺をよろこばすものはない。鶯や四十雀《しじゅう》から《も》、白い日光をさ青に煙らせている木の若芽も、ただそれだけでは、もうろうとした心象に過ぎない。俺には惨劇が必要なんだ。その平衡があつて、はじめて俺の心象は明確になつて来る。俺の心は悪鬼のように憂鬱に渴

いている。俺の心に憂鬱が完成する
きにばかり、俺の心は和んでくる。

——おまえは腋の下を拭いている
ね。冷汗が出るのか。それは俺も同じ
ことだ。何もそれを不愉快がることは
ない。べたべたとまるで精液のようだ
と思ってごらん。それで俺達の憂鬱は
完成するのだ。

ああ、桜の樹の下には屍体が埋まっ
ている！

いったいどこから浮かんで来た空
想かさっぱり見当のつかない屍体が、
いまはまるで桜の樹と一つになって、
どんなに頭を振っても離れてゆこう

とはしない。

今こそ俺は、あの桜の樹の下で酒宴
をひらいている村人たちと同じ権利
で、花見の酒が呑めそうな気がする。